

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2773800889		
法人名	特定非営利活動法人すみれ		
事業所名	グループホームすみれ		
所在地	大阪府羽曳野市野々上2-31-2		
自己評価作成日	平成31年12月27日	評価結果市町村受理日	平成32年3月6日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 http://www.city-yodogawa.lg.jp/27/index.php?action_kouhyou_detail_022_kani=true&Jigyosy

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ ナルク福祉調査センター
所在地	大阪市中央区常盤町2-1-8 FGビル大阪 4階
訪問調査日	平成32年2月4日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

開設17年目の1ユニット9名のグループホームです。認知症であっても重度化しても一人ひとりその人らしい生活が送れるような環境づくりを心掛けています。家庭的な雰囲気や大切に同居者の残存能力を活かし、家事活動にも積極的に参加してもらっています。自身でできることはやってもらうよう、声掛けや見守りを徹底し、過度な介護にならないよう心掛けています。また、行事やアクティビティなどでメリハリのある一日を送ってもらっています。職員も永年勤続者が多く統一した介護ができています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業母体のNPO法人すみれの代表者が、市の福祉事業課(当時)からの依頼で、一般住宅を改築して平成15年4月に当事業所を開設した。利用者一人ひとりが役割を担って、生きがいと目的を持ちながら生き生きと暮らす事を理念に掲げ、代表者・管理者・職員が一体となって実践に取り組んでいる。開設時より多種多様なボランティアによる三味線・しの笛・歌・話し相手・散歩時同行・囲碁・将棋・活き魚の解体ショー等で、利用者は日々の生活に豊かさや潤いを得ている。「地域の住民同士が地域の高齢者と共に助け合い共に生活する」の法人方針の具現化に向けて、小学校の福祉教育の授業や地域のふれあい祭りで、認知症の理解促進に努め、地域の中の福祉施設としての役割を担っている。職員は長年勤務者が多くて定着率が高く、利用者・家族は安心と信頼を寄せている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅰ.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	運営理念を明確に示している。個別性を重視しその人らしさが発揮できる支援を心がけている。	事業所開設時に創った理念「日々の時間の流れを大切に、いきいき元気ある暮らしを育む」を、玄関・リビング・エレベーターの目に付く所に掲示している。理念の趣旨にある利用者・家族・職員が共に生き生きと元気で暮らせるよう、常に意識と確認をしながら、実践に取り組んでいる。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治体に参加し地域での盆踊りやふれあい祭り、近くの八幡神社に散歩やお参りに行ったり、民生委員主体の公民館でのおしゃべりカフェにも参加している。住民ボランティアに定期的にきていただき交流している。	地域の盆踊り・ふれあい祭りや、公民館のおしゃべりカフェへ参加し、散歩時に近隣の人と挨拶を交わして、利用者は地域の中の生活者として根付いている。多種多様なボランティア（楽器演奏・話し相手・散歩同行・囲碁・将棋・活き魚解体ショー等）の楽しみ事や、介護実習性の体験学習の受け入れ等、幅広い交流がある。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域のふれあい祭りで寸劇での認知症の理解をはかったり小学校での福祉教育授業にも参加している。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	報告書と活動内容のスライドショーで見てもらいながら活動報告を行っている。そこでの評価や助言も可能な限りサービスに取り入れている。事故報告やヒヤリハットなども全て報告している。毎回報告書、会議録は家族に配布している。	奇数月の第2水曜日を定例開催日とし、運営推進会議構成メンバー参加の下、年6回開催している。会議では、事業所の現状・活動・事故報告を行い、参加者から助言・要望・意見・質問を貰ってサービス向上に活かしている。曜日・時間帯の関係上、家族の参加が困難となっている現状を踏まえ、家族の意見収集の方法を検討している。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市担当者とはさまざまな相談などで連絡をとっている。市のグループホーム部会に参加し、情報交換や意見交換を行っている。月に一度介護相談員を受け入れている。	市の高年介護課や生活福祉課に、事業所の現状や取り組み内容の報告と、公的扶助受給者の(2名)の書類提出で、頻回に連携を取り合っている。10事業所による市グループホーム連絡会へ参加し、市の介護相談員を受け入れて協働関係を構築している。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	社外研修に参加し、全職員へ伝達研修を実施し周知徹底している。止むを得ない場合は家族へ書面を用い説明し、同意を得ている。	身体拘束適正化指針文書を整備して、年2回研修を実施し、3ヶ月に1度の身体拘束適正化委員会で事例を挙げて勉強会を行い、身体拘束の弊害と内容を職員は理解している。人感センサー使用の利用者には同意と納得を得ている。事業所周辺の交通量を考慮して、玄関・エレベーターは施錠している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ざれることがないように注意を払い、防止に努めている	社外研修に参加し、全職員へ伝達研修を実施し周知徹底している。身体的虐待だけでなく、言葉使いでの心理的虐待やスピーチロックの防止にも努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	社外研修に参加し、全職員へ伝達研修を実施し周知徹底している。必要になる入居者がいないかは常に念頭においている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約前に施設内の見学を実施。重要事項を書面にて説明し理解、納得いただいた上で契約を交わしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族面会時に入居者の現状をお伝えするなどしその都度家族の意見や提案を聞くようにしている。サービス担当者会議、家族会や行事参加時に意見や不満、要望なども表出の場としサービスに活かせる努力している。	利用者には日頃のケアの中で意見を聞きだしているが、把握困難な人は家族の訪問時に意見を聴取している。法人の関連事業所合同の家族会(年1回)は、企画作成から料理・イベント内容に家族が積極的にに関わり、年2回の活動行事(クリスマス会・昼店)でも、職員と共に協力しながら一緒に楽しんでいる。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員用の意見箱を設置している。毎月の全体会議やフロアーミーティング、毎日の申し送り時を意見交換や要望の場とし日々の介護に反映させている。	法人の関連3事業所の全体会議と事業所のスタッフ会議を各々毎月2回開催し、職員の意見を聞いている。年1回の代表者との面談時には、職員の家庭での現状や勤務体制の要望を聞いて改善に繋げている。職員の提案に沿って、利用者間の関係性に配慮した席替えや、利用者の良いところを直視したケアに取り組んでいる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年に一度面談を実施し勤務時間や希望を把握した上で勤務表を作成している。個人の評価は給与や賞与で反映させている。70歳を過ぎても働けるよう身体的負担が少なくなるよう福祉用具を活用している。また福利厚生も充実させている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	全職員対象の社内研修を毎月1回開催している。また個人に合わせた社外研修にも参加し、報告会や研修報告書の提出も義務化している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	認知症高齢者グループホーム協議会や介護福祉士会に所属し全国大会にも毎年参加している。市グループホーム部会の職員交流会や事例検討会、勉強会にも参加し意見交換もしている。毎年実習生の受け入れも行っている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	施設見学や事前面接を実施している。入居後の不安や要望はできる限り受け入れ、個々にあったケアを実践している。生活を共にすることで職員との馴染みの関係を築き安心できる対応に努めている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	施設への訪問や、面会などの制限はなく相談なども随時実施している。入居しばらくは電話やメールで密な報告を実施し、入居後の罪悪感を少しでも感じさせないように配慮している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	問い合わせ時に日常生活を把握し、必要に合わせたサービスの種類や利用方法を説明している。また満床時は他の施設情報も提供している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日々の生活を共にすることで入居者のADLを把握し得意なことで役割作りを行っている。また会話の機会を少しでも多く心がけている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月写真を掲載したすみれ便りを送付し、日々の様子や認知症状、体調など随時報告している。行事にも積極的に参加してもらい、入居者を共に支援していることを認識してもらうよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居してから今までの人間関係がなくなることのないよう、家族はもちろん友人、知人にも面会にきてもらったり、外出してもらったりしている。	利用者の友人・知人・親族の訪問があり、以前の会社関係の知人からの贈り物や年賀状が届く人もいる。市のグループホーム会「にじの会」の年4回の行事（鍋料理・バーベキュー・花見）に利用者・職員が一緒に参加して、馴染みの関係を築いている。墓参り・外食に家族の同行で出かける人もいる。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の関係を把握し、よい雰囲気での会話や気遣いなく過ごせるよう職員が適時に関わっている。リビングでも考慮した席決めを実施している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了後の家族がボランティアとして活動している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居時、また面会時にできる限り家族から情報収集している。また入居者との日々の関わりの中で言葉やしぐさや表情から訴えに気づき、1対1での援助時や外出時にしっかり傾聴し、職員で共有し一人ひとりの対応に努めている。	利用者との日々の関わりで会話を大事にし、入浴時・散歩時の個別で話が出来る機会に、思い・意向や何をしたいかを傾聴し、その人らしい生活の維持と、個性を尊重したケアとなるよう取り組んでいる。掴んだ情報は日勤・夜勤日誌に記録して全体で共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	事前面接時や入居後、本人や家族との交流を深め、できるだけ多くの情報収集に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の生活の中で入居者の変化を見逃さないよう、いつもとの違いを意識している。申し送りや記録などから全職員で情報を共有し把握している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	入居者の状況変化や希望、また家族からの希望に伴い都度カンファレンスで検討し、現状に即した介護計画を作成している。	日々の利用者の生活内容や医療記録、行事・レクリエーションの内容を記した日勤・夜勤日誌や支援経過記録を参考に、毎月のスタッフ会議でカンファレンスを行い、6ヶ月毎に現状に即した介護計画を作成している。計画作成後にケアマネジャー・管理者・家族で担当者会議を開いて検討している。利用者の身体状態の変化時には、臨機応変に対応している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	入居者の状況変化や希望、また家族からの希望に伴い都度カンファレンスで検討し、介護計画を見直している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	緊急時や家族の対応が困難な場合の通院や物品の購入など柔軟に対応し支援している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ボランティアを積極的に受け入れ、近所の公園、神社、カフェなどに外出している。定期的に訪問理容など地域との関わりを持つことで豊かな暮らしを支援するよう努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居者、家族の希望の内科医、歯科医、皮膚科医が定期的に往診し、適切な医療をうけている。胃ろうの方の定期的な受診などにも支援している。薬剤師などから薬の作用、副作用なども指導してもらっている。	従来のかかりつけ医を基本としているが、利用者全員が協力医院の内科(月1回)の往診を受けている。週1回の口腔ケア(歯科衛生士)、月1回の歯科往診、皮膚科(3ヶ月に2回)の往診は希望者が受けている。胃ろうの人には、協力医院医師の指導の下、資格を保有した職員が携わっている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	月に一度看護師の訪問があり、日々の様子を伝えている。また電話やメールなどで密な連絡を取り合い、必要に応じ受診をしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入居者が入院した時はできる限り面会し、医師や看護師と病状を確認し把握に努めている。長期入院のリスクを共有し、急性期が過ぎ次第、元の生活、環境に戻ることが重要と考え退院に向けて支援している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化に伴い看取りの介護を希望された方に対し指針や確認書を作成し、入居者がその状態と勘案された時、サービス担当者会議を開催し家族、医師、職員がそのあり方について確認し終末期ケアは介護者での最大限の看取り介護に努めている。	入居時に、重度化対応に関しての事業所の取り組み内容を、利用者・家族に説明している。利用者の身体状態の変化時に、医師からの説明と「重度化した場合における看取り指針」文書で、看取り介護の具体的内容・開始時期・連携体制を説明し、同意書を交わしている。開設以来16名の看取りを行っている。	看取り対応については、利用者・家族との信頼関係を築き、事業所で対応出来る最大のケアに努め、看取りの実績を積み重ねているが、入居時の利用者・家族の意思確認書の整備が不十分である。初期段階の説明書と同意書の整備を期待する。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	社内研修で職員間で実技での対応を実施している。急変時の対応など会議等で都度検討し、その場面に応じた適切な対応ができるよう緊急時のマニュアルを作成している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	昼夜を想定した、避難訓練を実施している。自動火災報知器、スプリンクラーの設置し定期的に点検を行っている。非常用品は見直し補充している。入居者に馴染みのある防空頭巾も備えている。台風などの風水害も意識し施設の環境面での注意も行っている。	年2回(内1回は消防署立ち合い)、昼・夜間想定防災訓練を実施している。緊急連絡網・自動通報装置・備蓄品(水・カンパン・缶詰・防空頭巾・ランタン等)を整備している。一般住宅を改築し、1階～3階に居室が分離している事業所の仕様を考慮した誘導方法や避難経路確保の対策を立てるために、近くの消防団への協力要請を推し進めたいとしている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人情報の取り扱いには、契約書を交わしている。職員の声掛けや対応は会議など接遇マナーについて定期的に議題としてあげ全職員で共有している。	接遇研修を通して、利用者の尊厳と権利を守る事は対人ケアの基本と捉え、人生の先輩として敬意をはらい、入室時のノックと声かけや、入浴・排泄時の羞恥心への配慮とプライバシー確保に留意している。対応が不適切な場合は、管理者が時と場所に配慮して、注意を促している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中で入居者のペースを尊重し、急がすことなく支援している。言葉がけや場面作りに配慮し可能な限り自己決定できる機会を提供している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者と日課を行う中で、入居者の言葉やしぐさや表情などから体調や希望を把握し一人ひとりのペースに合わせて支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	訪問理容を活用し、髪型、毛染め、顔そりなど本人の希望で行っている。ハンドマッサージを定期的実施したり外出時には化粧などにも配慮している。服装も自身で選んだものをきてもらったり、一緒に外出し購入したりしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	3食とも手作りしている。入居者には能力に応じて調理、配膳、片付けを職員と一緒にやっている。オリジナルメニューや外食などで希望を聞いたり、月に1度の解体ショーや日曜日は手作りおやつ、誕生日ケーキも手作りしている。職員は必ず入居者と食卓を囲むことで楽しい食事時間を提供している。	献立・食材調達は配食業者が行い、職員が交代で調理を行っている。利用者と職員はテーブルを囲み、会話を交わしながら一緒に同じ物を摂って食事を楽しんでいる。好みを取り入れた食事(週2回)と手作りおやつ(週1回)や誕生日のケーキ、干し柿作りを楽しんでいる。ボランティアによる活き魚の解体ショーは好評を得ている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	全員の食事・水分摂取量を把握している。体調不良時は個別に摂取内容も記録している。嚥下困難時や残飯などから食材の硬さや形状やとろみ剤も使用している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	起床時と食後には一人ひとりに合わせた口腔ケアを行っている。義歯の消毒も毎日実施し口臭予防にも努めている。希望者や必要時には訪問歯科の受診も受けている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄誘導表で入居者個々の排泄リズムを全職員で把握している。個人に合わせて声掛けや誘導したり、布パンツ対応でトイレで排泄できるよう努めている。尿パット類は枚数や種類も個別対応している。	排泄チェック表から利用者一人ひとりのパターンを把握し、事前の声かけでトイレ誘導をしている。オムツやパッド使用者が多いが、トイレで排泄出来るように支援している。トイレ内に移乗用リフトが取り付けられて、職員の負担が軽減されている。夜間は、ポータブルトイレの使用や個々のパターンに即して対応している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘による心身への影響を職員は理解している。自然排便を心掛けオリゴ糖やヨーグルト、牛乳を活用したり、水分量を把握し、予防に努めている。便秘時は医師との連携により投薬指示を受けている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本的に曜日は決まっているが、入居者の体調や希望に合わせて変更している。手浴や足浴なども実施している。身体機能に合わせて入浴用リフトも活用している。	入浴は基本的に週2回と決めているが、入浴拒否者や個々の体調・希望には柔軟に対応している。浴槽の湯は一人ひとり入れ替えて、足浴の支援や菖蒲湯を取り入れている。利用者の身体機能に合わせて、移乗用リフトを活用している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間の良眠に向け、日中の活性化をはかったり、一人ひとりに合わせた睡眠時間で支援している。室温、照明などの環境も配慮している。職員はポジショニングの研修で臥床位の意識を高めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方箋ファイルを作成し全職員が効能や副作用を把握できる体制をとっている。入居者の服薬について都度検討し、医師や薬剤師に相談している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日常生活や生活歴から入居者の好きなこと、得意な事を見出し、役割や居場所作りへと支援している。また、カラオケや習字、塗り絵や裁縫さまざまなレクリエーションも毎日実施している。バーベキューや焼き芋など季節を感じられる行事にも取り組んでいる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ボランティアの協力を得ながら公園や神社へ散歩に行ったり、スーパーや本屋、ドラッグストアなどで買い物での外出の機会を作っている。ホームのガレージに花を植え日光浴を楽しんだりもしている。外食やおやつ外出、初詣、夏祭り、花見など季節を感じられる外出も実施している。	天候や利用者の体調に応じて、ボランティアの人と一緒に近くの神社・公園に出かけたり、買い物等の目的を持った外出に進んで出かけている。農林センターへ梅・桜・紅葉の季節を感じに行っている。外出が困難な人は、事業所敷地のプランターの四季の花を見ながら、外気浴・日光浴を楽しんでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人別で金銭管理出納帳を作成し定期的に確認している。物品の購入希望があれば立て替えし使えるよう家族に連絡している。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望や状況に合わせて実施している。家族や親せきに電話をかけたり、年賀状や暑中見舞いを手作りし家族に送っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の花や観葉植物を複数の場所に置いている。ポランティアと一緒に作成した壁画や書道やパステル画の作品も展示し室内にいても季節感が感じられるようにしている。限りのあるスペースではあるが明るくしたり、温度や湿度にも配慮し安心、安全に過ごせるようにしている。	共用空間のリビング・居間は明るく、きれいに整頓され、窓辺には花や観葉植物が置かれて潤いと季節感が感じ取れる。壁には、書道や折り紙等が飾られ、天井に音符や数字を貼り、見上げて首の体操となるよう工夫している。温度や湿度に配慮し、居心地よく過ごせるようにしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングには個々の椅子や複数の座れる畳椅子を設置し、一人になったり、気の合う人との時間が取れるように配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	一人ひとり使い慣れた家具や生活用品、衣類等を持ち込みその人らしく過ごせるように工夫している。観葉植物を置いたり、本人手作りの作品や家族との写真を飾るなどしている。	居室には、ベッド・ダンス・エアコン・吊り戸棚（衣替えの衣料収納に適した）が設置されている。壁には、行事（運動会）の表彰状や手作り作品・家族写真等が飾られ、その人らしい居心地よい居室となっている。夜は加湿タオルを使用して湿度に配慮し、非常時の動線確保のために家具配置にも配慮している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	食事表、当番表や入浴表、手作りの日めくりのカレンダーを置いたり、居室やトイレ入口には表札を掛けわかりやすくしている。複数の場所に手すりや福祉用具を設置し、自立を促し入居者の残存能力の活用と安全を図っている。		